



# まいとりに मैत्री



No. 12 平成23年度 春号 - 2011. 4. 20 -  
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌

< मैत्री > :maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。

仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

## この度の大災害で被災されたすべての方々に、心からお見舞い申し上げます！

仏教会会長 渡辺章悟

去る3月11日の恐るべき大地震と大津波、そして福島原発という人災が重なって、私たちは今も深刻な状況から抜け出せないでいます。この災害は私たちから多くのものを奪いました。あまりの無惨さにことばもなく、自然の脅威の前に震え上がるばかりです。

しかし、わたしたちは決して絶望の淵に沈んでいるわけではありません。ともに悲しみながら今多くの人が立ち上がりつつあります。私たちは生きなければなりません。この苦難を乗り越えて再び新たな歴史を刻んでゆかなければなりません。私は未来への希望の力を信じたいとおもいます。ブッダのご加護を念じます。

ところで、今回は会員の町田敦志さんを紹介いたします。

町田さんは2004年印度哲学科の卒業生です。彼は4年近く前に自転車事故で首の骨を折り、半身不随となってしまいました。その後1年以上のリハビリを経て、手が動かせるくらいにまで回復しましたが、現在も車いすに乗るかベッドで休むかという生活を送っておられます。

その町田さんが、今年1月26日～27日(木)に、さいたま市のビジネスアリーナで開催された「彩の国ビジネスアリーナ2011」に自ら試作した自転車「トリニティドライブ」を出品して話題になりました。私もその会場に行って町田さんの活躍する姿と自転車を見てきましたが、本当に健常者も楽しんで乗れるような素晴らしい仕上がりでした。そこで今回は町田さんにその経緯を書いていただきました。



### 【目次】

仏教会長挨拶	……1	タイの仏教事情⑥	……5
仏青会長挨拶	……2	コラム「仏教と日本文化」⑩	……6
特別寄稿	……2	仏教映画レビュー	……7
研修報告	……3	書籍・イベント情報	……9
講演会—韓国仏教の姿—⑤	……4	今後の予定	……10

## 《仏青会長挨拶》

このたびの、東北地方太平洋沖地震をはじめとする大規模地震により被災された方々に、心からお見舞い申し上げます。昨年度に引き続き、仏教会会長を務めさせていただくこととなりました藤森です。

昨年度は設立から3年目となり、今まで以上に精力的に、活発に活動できた1年となりました。奈良での平城遷都1300年関連イベントへの参加・協力やインドネシア、ボロブドゥール遺跡研修旅行など関東近郊から、関西、または海外へと活動の範囲を広げ様々な体験をすることができたと思います。今後も、仏教青年会がみなさまに様々な経験、交流を生むきっかけの場になればと願っております。

また、平成21年度東洋大学仏教会、仏教青年会総会が中止となりましたこととお詫び申し上げます。それに伴いまして、例年、総会の際に承認後、決定致しておりました仏教会、仏教青年会幹事でございますが今年度は下記のようになりましたことをこちらでご報告させていただきたいと思っております。

### 平成23年度役員

#### 東洋大学仏教会 (TBA)

会長 渡辺章悟 (文学部インド哲学科教授)  
副会長 橋本泰元 (文学部インド哲学科教授)  
事務局長 岩井昌悟 (文学部インド哲学科准教授)  
幹事 山口しのぶ (文学部インド哲学科教授)  
沼田一郎 (文学部インド哲学科准教授)  
出野尚紀 (東洋学研究所奨励研究員)

#### 東洋大学仏教青年会

会長 藤森晶子 (大学院仏教学専攻博士後期課程2年)  
副会長 櫻井宣明 (大学院仏教学専攻博士後期課程3年)  
藤井 明 (文学部インド哲学科4年)  
幹事 大川詩織 (文学部インド哲学科4年)  
鈴木洋志 (文学部インド哲学科2年)  
松本和久 (文学部インド哲学科2年)

## 《特別寄稿》

### 印度哲学科を卒業しても四肢麻痺になっても、自転車だらけの人生

仏教会会員 町田敦志

私が第二の人生、四肢麻痺の障害者としての人生を歩み始めて4年が過ぎた。二度ほど死にかかったらしいが、どうやら生きている。ちなみに垣間見たあの世の景色だが……、お花畑や三途の川はなかった(笑)。覚えている限りでは真っ暗だった。どうやら賑やかな景色は都市伝説らしい。なんでも体験してみるものだ。

といっても、中学時代から続く自転車馬鹿人生を容易に諦めることはできなかった。もう一度自転車に乗ることが私のリハビリの目標だった。しかし数ヶ月経つと、どうやら下半身は絶望的だと分かってきた。ならば昔見たハンドサイクルというものに願いを託してみようと思った。だが調べ始めると自分の障害度合では乗ることが厳しく、さらに価格もネックだった。

今回作り上げたハンドサイクルはそれらを克服すべく、ベッドの上で考え始めて3年越しのアイデアを実現したものだ。あまり細かいことを書いても、普通の人にはさっぱり分からないと思うので、ざっと紹介しよう。車いすの座面と同じ高さにシートを設定し、力のない指でも簡単にブレーキが掛けられるように。それもハンドサイクルに多い前輪だけではなく、三輪すべて制御できるようにした。腕力の弱い人間でも漕げるように、ギヤを多段式に。車輪はMTBで標準の26インチにすることで、世の中に数多くあるスポーツバイク用の部品を流用できるようにした。



これが出来たのはもちろん自分の力だけではない、溶接してくれる宇賀神氏と、細部のデザインを詰めてくれ実際に制作できるようにしてくれたデザイナーの柴田氏のおかげだ。両氏に巡り会うまで1年以上多くの人に連絡を取った。感謝してもしきれない。

大学を卒業してから、自転車専門誌のスタッフ、フリーランスのライター、自転車ショップスタッフ、レーシングチームメカニックなどに携わった。それらで培った知識が役に立った。いつかオリジナルの自転車を作りたいと考えていたが、よもやハンドサイクルを作ることになるとは……、さすがに想像だにできなかった(笑)。

さらに、それを紹介する場に渡辺章悟先生を招くとは、もうまったく夢想だにできなかった。

人生とは不思議だ。

(今回の記事についての詳細は以下のHPをご覧ください。<http://trinitydrive.com/>)

## 《研修報告》

### 親鸞聖人のみあとを訪れて～稲田から本山へ歩く～

一月末、「親鸞聖人のみあとを訪れて～稲田から本山へ歩く～」に参加してきた。この行事は、本願寺の東京教区基幹運動推進委員会主催、「親鸞聖人七五〇回大遠忌法要」の記念行事である。親鸞が関東から京都に帰る際に通った場所を訪ねて歩く。今回は、箱根湯本から元箱根にかけての旧東海道が舞台である。参加メンバーはというと、引率の岩井昌悟先生、今回の行事参加の発端である四年の橋本順正先輩、同じく四年の板敷真純先輩、仏青副会長藤井明先輩、そして古屋である。



当日は朝八時三十分集合、九時出発。天気は非常に良かったが、凍えるほど寒かった。融けずに残っている雪を脇に見ながら、総勢三〇余名が行進。参加者の多くは高齢なので、ゆっくり進む。初めは平らであったり、なだらかだった道も、徐々に急になっていく。歩いて一時間もたつ頃には、当初の寒さなど全く気にならなくなるくらい息が上がっていた。そうこうするうちに、親鸞が付き添いの弟子たちと別れた、笈の平という所に到着。そこで親鸞は弟子の性信に經典を譲り、関東を託して一人京都へ帰ったと言う。

さて一行は、笈の平のすぐ傍の甘酒茶屋で休憩した後出発。急勾配や足場の悪さに辟易しながらも、ついに元箱根に到着。山道から一転して、観光地として賑わう街並みを通って万福寺へ。万福寺では住職の小笠原聰さんから、お話を伺った。曰く、親鸞は帰路の途中、箱根権現で歓待され、お礼に形見として自分の姿を彫った像と、十字名号残して去る。その後、箱根権現の境内に親鸞堂が建てられ、日々の給仕や堂守を万福寺が勤めていた。

明治の廃仏毀釈の際、箱根権現は箱根神社と改称され、仏像、宝物等は焼き払われたが、親鸞堂の護持を勤めていた縁で、万福寺に次の仏像等が譲渡された。行基作と伝えられる阿弥陀如来立像、聖徳太子作と伝えられる胎内仏、そして親鸞聖人像と十字名号である。しかし、親鸞聖人と十字名号は、東京本願寺に寄贈されたまま現在に至るそうである。これで一日の行事は終了だが、我々はもう一つの目的のため箱根に留まった。

二日目は親鸞と箱根、特に箱根神社との関係について調査を行った。まず我々が宿泊した施設のすぐ傍のロープウェーに乗って駒ヶ岳頂上の箱根神社の元宮へ。駒ヶ岳は古来、神が馬に乗って天から



降り立ったと伝えられる。お話は元宮の禰宜であり、学芸員でもある大貫克己さんに伺った。驚いた事に、大貫さんと板敷先輩は親戚であることが判明し話も大いに弾んだ。元宮を辞して、次は箱根神社へ。箱根神社は、修験道に関係が深い万巻上人が箱根山を開いた事に端を発し、鎌倉時代には、幕府とも縁が深い聖地であった。また親鸞が箱根権現を訪れたのは、そこに尊敬する兄弟子の聖覚との縁があった可能性があるためだ、等々のお話を宝物殿の一室で禰宜であり、学芸員の柘植美満さんに伺った。親鸞の足跡を訪ねる旅は箱根神社で終わり、名残惜しさを残して帰路に着いた。

(インド哲学科3年 古屋千瑛)

## 《講演会》

### 韓国仏教の姿 ―日本仏教の源―⑤

ところで、ここでもう一つ言わなければならないのが成実宗の存在です。先ほど述べた、高句麗や百済の両方に通じることなのですが、初期に日本へ渡った慧慈・慧聡・観勒は三論の人であると言っても、後の慧観の三論とは学問的の傾向をやや異にすると考えられるからです。慧観は吉蔵の三論を継承して日本三論宗の初伝となりましたが、前の三人は『成実論』にも詳しく、聖徳太子に『成実論』を教えたと言われます。要するに高句麗や百済では『成実論』と三論の研究が並存して、その影響で日本においては三論宗と成実宗の関係が対立的でない流れとして両立可能であったと考えられます。後に慧均のように三論の立場から成実義を批判する人も出てきますが、日本で活動した百済出身の道蔵のように『成実論』を主に研究することもありました。道蔵が『成実論』を主にしたのは百済或いは高句麗における三論・成実の研究を並行する伝統の名残りであると考えられます。現在、道蔵疏は逸文で見える限り、三論宗の中で度々用いられています。これは直接的には日本の宗派において成実宗と三論宗とが兼学されるからなのですが、日本初期の三論と成実を並行して研究する伝統が後々まで残っていた証左であります。実際に、道蔵疏は鎌倉時代までは東大寺の三論宗から研究され続けました。

次は法相宗ですが、韓国における法相宗に関連する記録或いは著述は、百済や新羅に限って少し分かるといった具合です。まず、仏教をはじめて日本に伝来した百済に関しては記録が不足しているためほとんど不明で、僅かに義栄の唯識説が最澄に引用されることからその一面を窺い知る程度です。なお、憬興は後に新羅において国師となりますが、もともと百済の人でありました。日本の法相宗と深く関係し、かつまた影響を与えたのは憬興を含む新羅の唯識僧です。

ところで、日本の法相宗を論じる場合、新羅から撰論学が先に入ったとする前提から論を展開することもあります。実際に撰論学が入っているかどうかは不明ですが、その可能性は充分あったと認められています。なお、730年までは新羅系の法相宗が勢力を持続していたことも認められています。日本では、奈良時代まで法相宗の基と円測を均等に研究する学風が存在したことは、こうした新羅仏教との関連性の上で説明できると思います。

次は華嚴宗についてです。日本の華嚴宗は智鳳を受けたとする義淵の弟子達によって形成されており、その一人に良弁がいます。その良弁の系譜を受けている慈訓、智憬などが初期日本華嚴を主導しますので、法相宗と華嚴宗はある程度同様の思想形態をもっていたと考えられます。

義淵が華嚴も重んじる新羅法相宗の流れを汲んでいるので、彼の弟子も法相と華嚴を兼学する人が多かったとする説があります。目録から見ると、新羅の法相学者の中で、華嚴を明らかに重んじた人物と言えば、元暁と大賢しか見当たらないわけですが、この二人の存在感から肯首し得る説だと考えられます。これに如来蔵や『起信論』関係の著述を残した法相学者にまで視野を広げれば、前の二人の他に、円光、憬興、勝莊、義寂、大衍などが加わります。初期日本華嚴の教理で『起信論』が重要な位置付けを担っているのは、こうした新羅唯識の学風を汲んでいるからだとも見ても無理ではないと思います。

2010年1月27日 於東洋大6号館

(金 天鶴 金剛大学校仏教文化研究所 所長)

## ～タイの仏教事情⑥～

## —タイ仏教教育の歴史と現状 (3) —

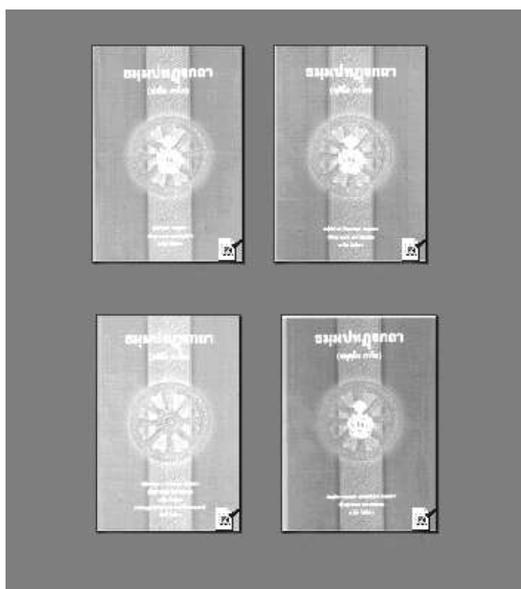
前号の続きとして、パーリ語国家試験のおおの「段位」の内容をなす受験課目についてより詳しく紹介したいと思う。

第一、二段では、基本的文法の学習、タンマパダとその註釈（前半）の翻訳を学習する。

段三段では、上級文法の学習、タンマパダとその註釈（後半）の翻訳を学ぶ。パーリ語文法を勉強するには、サンスクリット語文法の学習方法と同じように、理解力のみならず、ある程度の記憶力を必要とする。筆者が所属している寺院では、パーリ語を習得している沙弥と僧侶に文法書の全文の暗記を奨励している。例えば、全書を暗記できる者に対して、賞が与えられるなどである。上級文法の学習には、パーリ語文章にある言葉のそれぞれの役割の分析と文法上の名称などが対象とされている。次に、翻訳の対象とするダンマパダというパーリ文献についてであるが、ダンマパダというのは、『小部』に属する有名な原始仏典の一つで、「真理の言葉」といわれている。本書



は26章に分類され、全部で423の短い詩から成る。それぞれの詩に対して、詳しい註解や因縁物語が挙げられる註釈文献が現存している。タイでは、決まった形式の訳文をまとめた教科書を8冊にして、第二段では、ダンマパダ第一冊～第四冊を学習の対象としているが、段三段では、第四冊～第五冊を使用している。試験の問題を出す際には、約1ページのパーリ文（詩を含む場合もある）が出されるが、その教科書に従う翻訳が求められる。異なった翻訳は許されないとはいえないが、減点される可能性は高い。そのため、文法学習と同様に、ある程度記憶力が必要になるであろう。また、パーリ国家試験の採点方法についても興味深い問題がある。即ち、採点と言うよりも、むしろ減点方式を中心として試験の結果を決めているのである。訳文には、言葉の意味を間違って翻訳すれば、2点減点される。格(vibhatti)の間違ひがある場合、一箇所ずつ3点、主語と動詞の間違ひには、6点を引かれる。最大18点までの減点が許されるが、それを超えると不合格となる。



パーリ語教科書（タンマパダの註釈書）

第四段では、Maṅgalatthadīpanī（マンガラッタディーパニー）の翻訳と、ダンマパダタイ語訳第一冊をパーリ語化する。マンガラッタディーパニーは、16世紀にタイの北部において活躍していたシリマンガラ長老によって著作された文献である。その内容は、『小部』のMaṅgalasutta（『吉祥経』）を説いたもので、即ち、人生の幸福と繁栄を導く38項目に関して、パーリ註釈書、複註、Visuddhimagga（『清浄道論』）などの諸パーリ文献から様々な話を引用し、タイでは有名な文献である。この文献が5冊教科書に分けられるが、第四段では、第一冊を使用している。第五段では、マンガラッタディーパニー第二冊をタイ語に翻訳し、タイ語訳をパーリ語化する科目にはダンマパダタイ語訳第二冊～第四冊を使用している。

第六段から第九段までは、それぞれ異なる教科書を学習の対象としているが、字数制限の関係で、これについては次号で紹介したいと思う。

プラチャッポン (Phramahāchatpong Katapuñño)

大学院仏教学専攻博士後期課程3年

## ～コラム「日本文化と仏教」⑩～

## 鴨長明『方丈記』の現実

仏教会会員 作家 永田道子

高校生の頃、『方丈記』の世界にあこがれていた。誰にも干渉されない自分だけの空間で独り毎日ただ本を読み、木々の梢を吹き抜ける風の音を聞いて、心静かに一生を送れたらと思っていた。『方丈記』の記述からその簡素な草庵を想像し、実際に凶面らしきものをルーズリーフの切れ端に描いてみたりもした。

東に三尺余の庇をさして、柴折りくすぶるよすがとす。南、竹の簀子(すのこ)を敷き、その西に閼伽棚を作り、北に障子をへだてて阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢を掛き、前に法花経(法華経)を置けり。東のきはに蕨のほども敷きて夜の床とす。西南に竹の吊棚をかまへて、黒き皮籠三合を置けり。すなはち、和歌・管弦・往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに琴・琵琶おのおの一張を立つ。いはゆる、をり琴・つぎ琵琶これなり。かりの庵のありやう、かくのごとし。(「新潮日本古典集成」 以下同)

作者の鴨長明が京の都の南東の地・日野の山間に庵を結んで移り住んだのは六十歳の頃。その前に洛北の大原に五年間ほど隠遁していたが、そこは当時すでに「隠遁文化人のメッカ」になっていて何かと雑音が多く、わずらわしくなったようである。彼自身、「六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りをむすべる事あり。いはば、旅人の一夜の宿を作り、老いたる蚕の繭を営むがごとし」と記しているが、むろん、高校生にそんな老いの心境など感じ取れるはずもなく、ただ、若さゆえの感傷的な現実逃避願望でしかなかった。

鴨長明は、下賀茂神社の禰宜惣官の子に生れ、世の中は保元の乱、平治の乱と「武者の時代」への変換期ながらも恵まれた少年時代を送っていたが、十九歳のとき、父と死別。約束されていた将来は崩れ落ち、住居を転々としつつ自分の力で生きていかねばならなくなった。これを挫折というべきか、いささか迷うところだが、彼が人の世の無常を痛感したことは間違いない。和歌と琵琶に才能があり、認められて和歌所寄人に推挙されるまでになったが、念願の神職継承の道は叶わず、やがて庇護者の後鳥羽院も失うに至って、深い失意に沈み、失踪事件も起こした。出家と隠遁はその延長線上にあり、彼にとっては鬱屈の捨て所であり、またささやかなレジスタンスでもあったのだ。こういう生き方を文化人特有の自意識過剰と切り捨ててしまうのは簡単だが、しかし、そもそも文芸はそうしたものでなりたっている。煩惱と執着と自意識の狭間で煩悶し、自己弁護と自己批判をこねくり返しながら老いていくのが文芸の世界の凡夫の業なのだ。

そもそも、一期の月影かたぶきて、余算の山の端に近し。たちまちに三途の闇にむかはんとなす。何のわざをかかこたむとする。仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、閑寂に着するも、障りなるべし。いかが、要なき楽しみを述べて、あたら、時を過ぎさむ。

静かなるあかつき、このことわりを思ひつづけて、みづから心に問ひて云はく、「世をのがれて、山林にまじはるは、心を修めて道をおこなはむとなり。しかるを、汝、姿は聖人(ひじり)にて、心は濁りに染めり。栖はすなはち浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつところはわづかに周梨槃特(しゅりはんどく)が行ひにだに及ばず。もし、これ、貧賤の報のみづからなやますか、はたまた、妄心のいたりて狂せるか」

その時、心、更に答ふる事なし。只、かたはらに舌根をやとひて、不請阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ。

浄名居士は維摩居士のことで、維摩の居室は一丈四方(約3m四方)の極小空間ながら、数万人の菩薩が集まり入れるほど広大で、菩薩たちの悟りの世界を包括するほど豊かという意味。周梨槃特は仏弟子の中でもっとも愚鈍といわれながら後に大成したチューダパンタカのことである。維摩を志したのに周梨槃特の愚直だがひたむきな行いにすら及ばないではないかとおのれを糾弾しているのだ。だが、彼の心は黙して答えようとしな。ただ、衆生が救いを請わずとも手をさしのべてくださるという阿弥陀仏の名を唱えてみるが、それも両三遍、つまりわずか六回唱えただけで止めてしまうのだ。信じきれぬ哀しさである。

彼のもう一つの代表作『発心集』にもこんな一節がある。

阿弥陀仏の悲願はなほざりなる事かは。諸仏の捨て給へる五逆の悪人をも助けんと誓ひ給へれば、昔も今も、智あるも智なきも、貴賤道俗老少男女をえらはず往生するためし、耳に満ち眼にさへぎれり。聞けども信ぜず、見れどもたふとまず、ただ末世の我等が分にはあらずとのみもてはなれて、或いは宿業と云ひ、或いは天魔のしわざなど云ひつつ、行者のはげみと仏の願力とをば、自分も信ぜず、人にも退心を発さずは、いと心うき事なり。かく賢く尊きかと思へば、さきの世の業報定まりて、得がたき福祐をばいかにせんと火水に入るとく仏神に祈りさわぎ、昼夜に走り求む。詮は、ただ深く無明の酒にたぶらかされて、正念を失へるなるべし。

これはまさに彼が自身を省みて、自嘲する言葉である。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例(ためし)なし。世の中にある、人と栖(すみか)と、またかくのごとし。(中略)

朝に死に、夕に生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。不知(しらず)、生れ死ぬる人、何方(いづかた)より来たりて、何方へか去る。また不知、仮の宿り、誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主と栖と、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。或は露落ちて花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或は花しぼみて露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つ事なし。

『方丈記』冒頭のこの部分は、教科書にもかならず登場する名文中の名文である。高校生の頃暗記するほど親しんだこの一節も、いま、この状況下で読み返すとまた胸に強く迫ってくる。合掌。

## 《仏教映画レビュー》

### ○映画「手塚治虫のブッダ・赤い砂漠よ！美しく」を勝手にレビュー

※本稿はあくまでも個人的見解です

手塚治虫といえば漫画界に燦然と輝く巨星である。1989年に亡くなるまでの生涯に遺した数多ある作品群のなかでも、1972年より少年漫画誌「希望の友」にて約10年間連載された大長編「ブッダ」は、手塚氏後期の作品にして完成度も高く、まさに氏の集大成ともいえる作品だ。全14巻(潮出版社)にもものぼる壮大なストーリーが、このたび三部作の長編アニメ映画として甦ることになった。先日、5月28日の公開に先駆けて試写会へお邪魔したので、視聴後の感想などを“勝手に”書かせていただく。

#### ・ストーリー

2500年前、インド。王国間の争いが絶えないこの地に、世界の王になると予言された男の子が誕生する。シャカ国の王子、ゴータマ・シッダールタだ。思春期を迎えたシッダールタは、盗賊の少女ミゲラら身分の低い人々と心を通わせ、厳しい階級社会に疑問を抱くようになる。やがて強大なコーサラ国がシャカ国に攻め入り、激しい戦争が始まった。コーサラ国軍の指揮をとるのは、將軍の息子にして国一番の勇者チャプラ。奴隷の生まれを隠し、將軍の命を助けてのし上がった男だ。最下層の身分から立身出世しようともがくチャプラと、家族、身分、富、全てを捨てて、成すべき道を求めるシッダールタ。二つの正反対の魂が戦場で交錯し、互いの運命が変わろうとしていた。

人はなぜ生きるのか、なぜ苦しまなければならないのかー壮大ないのちのドラマが始まるー！(パンフレットより)

#### ・レビュー

第一部ではおよそ単行本1~4巻にあたる若き日のブッダ、シッダールタが出家に至るまでのストーリーを描いている。伝記にはないオリジナルのキャラクターが数多く登場し、手塚氏の遊び心を残しつつスリルのある仕上

がりになっている。それぞれキャラクターの容姿は手塚風ではなく近年のアニメ調にアレンジされており、私はこれまで手塚氏の「ブッダ」を読んでいなかったのが先入観なしに観ることができたが、手塚絵が好きな方には評価が分かれるところかもしれない。吉永小百合をはじめとした声優陣は豪華の一言。観世清和の初声優にも驚かされた。

映画を鑑賞し終え、エンドロールに流れる XJAPAN の主題歌を口ずさんでいると、私は無性に漫画版「ブッダ」を読んでみたくなった。普段まったく漫画を読まないが、すぐに取り寄せて食べるように読破してしまった。とても面白かった。手塚作品を知らない若者には、この映画を導入として、ぜひ漫画版のほうも手に取ってほしい。漫画「ブッダ」への導入の一本としても、この映画は最適かもしれない。

なお、先の震災の影響で洪水のシーンがカットされるなどの修正があった。東映では映画をモチーフにしたポストカードを販売し、その収益を義援金に充てるといふ。また、公開にあわせ4月下旬から東京国立博物館で「手塚治虫のブッダ展」が開催されるので、ご興味のある方は是非。

(インド哲学科2年 鈴木洋志)



・映画「手塚治虫のブッダ -赤い砂漠よ!美しく-」

手塚治虫が10年の歳月を費やして書き上げたマンガ『ブッダ』の映画化。ブッダの説話に基づきつつ独自のドラマを構築し、ブッダの素顔に迫る。

5月28日(土) 全国ロードショー (東映株式会社)

オフィシャルサイト: <http://www.buddha-movie.jp>

・東京国立博物館特別展「手塚治虫のブッダ展」

『ブッダ』のオリジナル原画と仏像を同じ空間に展示する試みで、手塚が追及したブッダの世界を間近に鑑賞する。

日時: 4月26日(火)～6月26日(日) 9:30～17:00

\*土日祝日は18:00まで

\*4月中は10:00～16:00

観覧料: 一般800円、大学生600円

展覧会公式サイト: <http://www.buddha-tezuka.com>

## 《書籍・イベント情報》

### ○《書籍》

#### ・『インド宇宙論大全』

定方晟/著（春秋社 3465円）

多様にして混沌の国を舞台に、宇宙の成り立ちから世界の終末まで、神と人と生命あるものの一切を、多数の図版と写真を交えて描く、魅惑のインドコスモロジー！

#### ・『浄土教の世界』

勝崎裕彦、林田康順/編 小澤憲珠/監修

（大正大学出版会 1995円）

浄土教とは、その歴史と祖師たちと法然、その文化と現代の社会にまで言及した一冊。

#### ・『仏教の常識としきたり』

大法輪閣編集部/編（大宝輪閣 1680円）

ブツダの生涯、お経の種類、日本仏教各宗派の開祖と教義など、基礎知識をやさしく解説。また葬儀・法事、お墓参り、お盆など、仏事のしきたりへの疑問に、Q&A方式で分かりやすく回答。さらに修行僧の食事のとり方、巡礼・写経の心構え、お寺参りでの決まり事など、生活に生かしたい美しい作法の数々も紹介。

#### ・『妖怪玄談』

井上円了/著 竹村牧男/監修（大東出版社 1995円）

文明開化の明治時代において、なお人々は呪いや祟りといった前近代的な迷信にとらわれていた。哲学者井上円了は、古今東西の「妖怪＝不可思議な現象」を精査し、迷信として打破する一方、真の妖怪たる精神と宇宙の謎を探求し、哲学の普及と実践に奮闘した。気宇壮大な円了思想の精髓を一冊に凝縮！

#### ・『お釈迦さまの脳科学』

苦米地英人/著（小学館 735円）

『洗脳原論』の著者（「彼氏ができる着うた」の作者でもある）による数多い著作の中の1冊。

### ○《イベント》

4月から7月に行われる仏教イベントです。

#### ・江戸東京博物館 特別展「五百羅漢 増上寺秘蔵の仏画」

増上寺に秘蔵される狩野一信（1816-63）の大作「五百羅漢図」全100幅を寺外で初めて一挙公開。

日時：未定

\*震災の影響により閉館中ですが、5月頃に開館の予定  
観覧料：一般1300円、大学生1040円

#### ・世田谷美術館 企画展

##### 「白州正子 神と仏、自然への祈り」（生誕100年特別展）

能面を求めて各地を旅する正子が出会った神や仏、自然を彼女の著作と関連づけながら紹介する。展覧会には多くの国宝や重要文化財、秘仏が集結する。

日時：3/19～5/8

10:00～18:00

観覧料：一般1200円、65歳以上・大高生1000円

#### ・永青文庫 春季展示「禅僧の書画」

禅僧たちの書画には、深い教養とともに厳しい修行を通じて滋養された気の充溢と、ユーモア溢れる人柄が映し出されており、造詣に注目しながら紹介する。

日時：3/19～5/22

10:00～16:30

入館料：一般600円、大高生400円

住所：東京都文京区目白台1-1-1

#### ・東京芸術大学大学美術館 展覧会

##### 「香り かぐわしき名宝展」

6世紀の仏教伝来とともに日本に広まった「香り」文化にまつわる美術作品を紹介しながら、目に見えない香りの魅力を味わう。

日時：4/7～5/29

10:00～17:00

観覧料：一般1300円、学生800円

## ～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

## 《定例研究会》

毎月一回、打ち合わせ後に「大智度論を読む」を行います。

4月27日(水) 6号館4階 インド哲学科共同研究室

5月18日(水) 6号館4階 文学部会議室

6月22日(水) 6号館4階 文学部会議室

7月27日(水) 6号館4階 文学部会議室

時間は各回とも16時20分～17時50分

## 《語学勉強会》

## ○仏教漢文講読会

講師：橘川智昭

開始日：4月7日(木) 2時40分～4時10分

会場：5303教室

## ○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：第2・第4火曜日の4限

内容：『ブッダチャリタ』か『ラリタヴィラスタラ』といった仏伝を読みます。

## ○チベット文献講読

講師：石川美恵

日時：4月11日(月)以降、隔週月曜

18時30分～19時30分

内容：ツォンカパの『ラムリム』「菩提心の儀軌」の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です。

会場：インド哲学科共同研究室

参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

## 《各種研修》

## ○哲学館・東洋大学の史跡を歩く

引率：出野尚紀

場所：哲学堂公園・蓮華寺など

日時：5月4日(水) みどりの日、13時

集合場所：都営大江戸線落合南長崎駅改札口

解散場所：西武新宿線新井薬師前駅

昼食は各自で済ませてから来て下さい。

## ○増上寺と江戸東京博物館の五百羅漢をめぐる

引率：渡辺章悟

日時：5月15日(日)

場所：浄土宗大本山増上寺・安国殿と江戸東京博物館

秘仏・黒本尊阿弥陀如来の御開帳、経蔵の特別公開

## ○「感じるからはじめよう！仏像の旅」

仏像ガール(広瀬郁美)の講演、声明公演協力

日時：5月28日(土)

開場：14時30分

講演：14時45分～15時45分

会場：東洋大学白山キャンパス 井上円了ホール

\* <語学勉強会>は資料等の準備がありますので、末尾に記載した仏青会長、または仏教会事務局長宛まで、あらかじめご連絡下さい。

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ(<http://www.toyo-yimba.org>)をご覧ください。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、このアドレスまでご一報下さい。

編集責任者：文学部インド哲学科3年 鈴木伸幸

**東洋大学仏教会**

卒業生、一般：年会費3000円、特別賛助一口5000円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

**東洋大学仏教青年会**

学生：年会費1000円

東洋大学仏教青年会会長 藤森晶子

db1000016@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>